



人工股関節について説明をする石部医師

石部医師が行う低侵襲手術が従来の手術と大きく異なるのは、傷口の大きさだ。これまでは皮膚を20センチ近く切開し、患部を肉眼で確認しながら骨を切り、人工関節を挿入していた。それが、今は7〜8センチにまで小さくなった。限られた視野を補うために、石部医師が活用しているのが、ハイテクを駆使したナビゲーションシステムだ。手術前に、撮影しておいた患部のCTデータをもとに、人工股関節のサイズや挿入角度、骨切りする部位を決定する。そうしてできた手術の設計図と実際の手術の状況が、コンピュータ上で

以前は人工関節の耐久性の問題から、60〜65歳以上の患者を対象としていた。それが今は、手術の技術も、人工股関節のデザインも素材も格段によくなたため、もっと若い年齢でも手術を受けられるようになった。一年間の再置換率（人工股関節を新しいものに入れ替える率）は1%以下に抑えられている。

シクし、画面上に映し出される。石部医師は画面を確認しながら、ミリ単位で挿入位置の骨を削り、人工関節を設置する。「ナビゲーションシステムがなくても、手術は可能です。しかしこれを使うと迷わず手術ができるので、手術時間の短縮につながり、患者さんの負担も軽くなります。これまでは長いと2か月ぐらいかかっていた入院期間も、低侵襲手術では10日ほどですみ、傷痕も目立ちません」（石部医師）

変形性股関節症の8割は遺伝的な要素で発症

人工股関節手術が必要となるのは、股関節が変形して、強い痛みが出ているようなケースだ。「変形性股関節症」という病名によるものが圧倒的に多い。「日本人の、とくに女性は、臼蓋という大腿骨の骨頭を受け止める、骨盤側の覆いの部分が遺伝的に浅い「臼

変形性股関節症の8割は遺伝的な要素で発症

人工股関節手術が必要となるのは、股関節が変形して、強い痛みが出ているようなケースだ。「変形性股関節症」という病名によるものが圧倒的に多い。「日本人の、とくに女性は、臼蓋という大腿骨の骨頭を受け止める、骨盤側の覆いの部分が遺伝的に浅い「臼

蓋形成不全」であることが多い。歩行時などの衝撃をうまく受け止められないため、歳を重ねるうちに軟骨が減っていき、変形が起きやすいのです。この病気は進行性だが、初期なら手術以外の方法で様子を見るのが一般的だ。具体的には、減量したり、筋肉をつけたりして、股関節に負担がかからないような生活習慣の改善を行う。痛み止めも必要に応じて使う。こうした改善を試みても痛みが治まらず、歩くのも困難になるなど、日常生活に支障が出てきたら、手術を検討する。

「人工物を入れることに抵抗を感じる患者さんもいらっしゃいます。実際、治療を受けると驚くほど痛みが消えます。正座もできますし、今までの生活が戻ってきます」（石部医師）

高齢化社会の到来で、今後患者は確実に増える。人工股関節治療の重要性が高まることは間違いない。しかしその一方で、技術や素材の進歩に支えられてい

るといえ、豊富な症例数、そして理学療法士や看護師らとのチーム医療という2つの要素が揃っていないければ、いい医療、いい結果は生まれない。とくに自分や家族が重大な病気になるたとき、どの病院の医師や医療チームに治療をしようか、はきわめて重要な問題だ。

フジテレビ「最強ドクター」シリーズは、そんな思いを胸に、渾身の思いで制作した番組だ。すべての治療過程を明らかにし、病に立ち向かう患者や医師の姿をガチンコで追いかけてきた。

医療に100パーセントは

「最強ドクター」とは、2006年5月から数回にわたって放送された医療特番で、その番組で取り上げた内容の一つが、最先端の人工股関節治療だった。

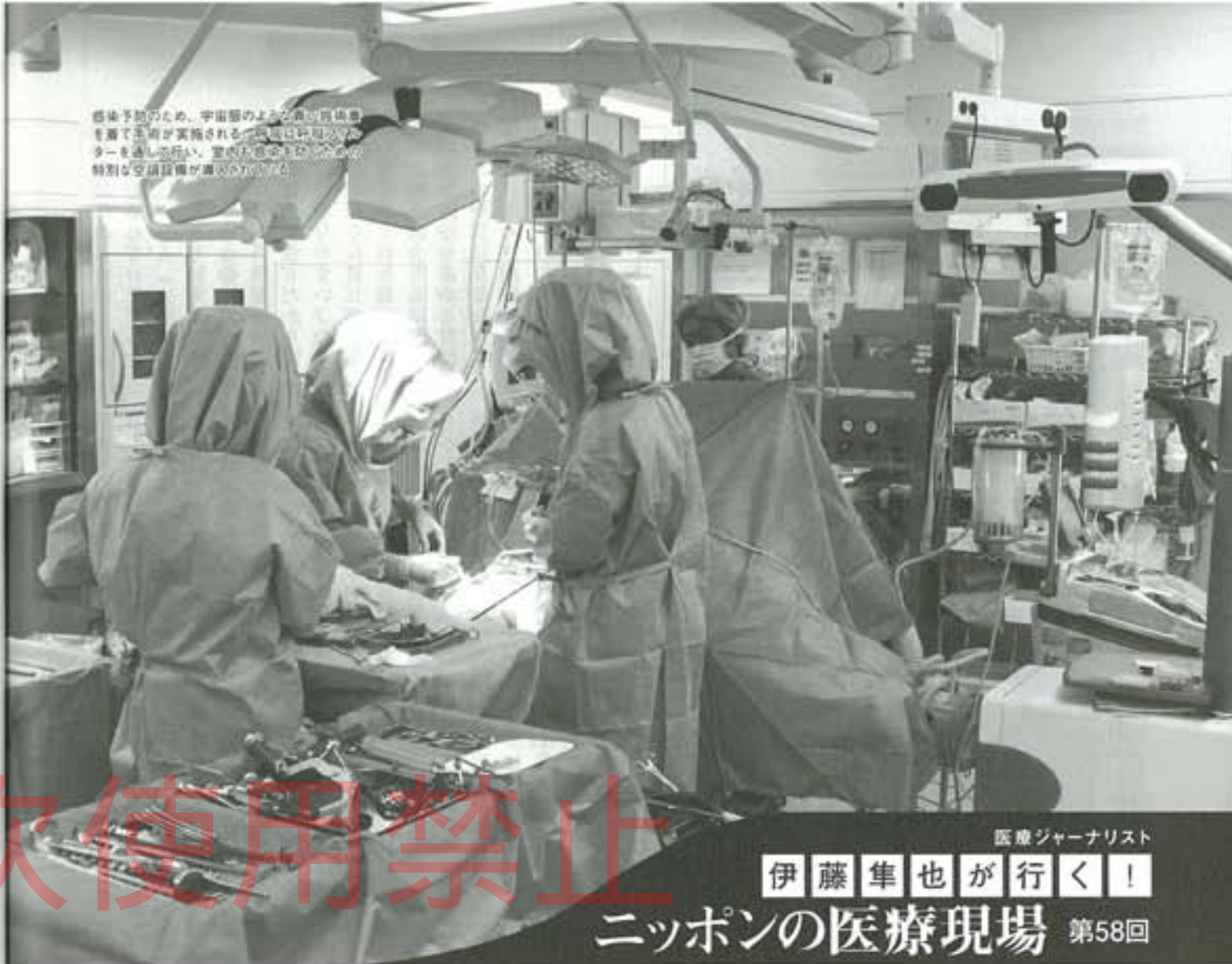
「まさにあの番組がきっかけで、傷が小さい低侵襲の人工股関節手術の存在を、多くの患者さんに知ってもらえました。また、多くの医師もそれに追随するように、低侵襲の手術を導入し始めました」

こう話すのは、番組に登場した石部基実クリニック（札幌市南区）院長の石部基実医師。年間550〜600例という、日本有数の症例数を誇る人工股関節治療の専門家だ。患者の半数以上が道外からやってくる。

人工股関節手術とは、その名の通り、チタンやセラミックスなどの素材でできた人工の股関節を、すり減った自分の股関節と置き換える手術だ。現在、わが国では年間約5万件の手術が行われていて、8年間で2万件増えたという。



左右に人工股関節を入れた患者さんのCTデータ



感染予防のため、宇宙部による無菌環境を築き手術が実施される。手術は約2時間の手術を行い、室内の空気は常に最新の特別ろ過装置が濾過されている。

医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く!

ニッポンの医療現場 第58回

『最強ドクター』放送から8年 低侵襲・短い入院期間が普及 人工股関節治療最前線に迫る

2006年。僕はフジテレビの医療特番で「最新のハイテク医療」として、傷が小さく入院期間も短い最先端の人工股関節手術を取り上げた。視聴者から大きな反響を呼んだあの番組から8年が経ち、今も第一線で活躍する人工股関節治療の専門家を再び、訪ねた。

傷口は僅か7〜8センチ 入院期間は10日間程度

「最強ドクター」とは、2006年5月から数回にわたって放送された医療特番で、その番組で取り上げた内容の一つが、最先端の人工股関節治療だった。

「まさにあの番組がきっかけで、傷が小さい低侵襲の人工股関節手術の存在を、多くの患者さんに知ってもらえました。また、多くの医師もそれに追随するように、低侵襲の手術を導入し始めました」

こう話すのは、番組に登場した石部基実クリニック（札幌市南区）院長の石部基実医師。年間550〜600例という、日本有数の症例数を誇る人工股関節治療の専門家だ。患者の半数以上が道外からやってくる。

人工股関節手術とは、その名の通り、チタンやセラミックスなどの素材でできた人工の股関節を、すり減った自分の股関節と置き換える手術だ。現在、わが国では年間約5万件の手術が行われていて、8年間で2万件増えたという。